

二〇三三年四月七日

終点と肩叩かるる目借時  
花屑の張りつく雨の石畳  
墓守の背へ降り注ぐ花吹雪  
春山路園児らに道譲りけり  
花時の堤に現れし料金所  
花は葉に卒寿の命全うす  
女子会のメのケーキは春苺

智恵子  
ぼんこ  
かえる  
せいじ  
せいじ  
千鶴  
あひる

二〇三三年四月六日

下り来る子らの挨拶春山路  
風見鶏上機嫌なる南風  
一駅を歩くと決めて花惜しむ  
街路樹の次は私と花水木  
満ち潮に押し戻さるる花筏  
異国語の歓声上がる花堤  
花の雲目路に山上レストラン  
沖遙か帰雁は列を正しけり  
風光る両手離しに一輪車  
堰落つる水に渦巻く花の屑

あひる  
智恵子  
もとこ  
明日香  
みきお  
せつ子  
はく子  
素秀  
満天  
せいじ

二〇三三年四月五日

巢立ちゆく子らへ餞別花吹雪  
川底の影が併走花筏  
入り汐の水門越えて初燕  
静かなる琵琶湖疎水に桜散る

澄子  
せいじ  
素秀  
せいじ

二〇三三年四月四日

頬杖の崩れ落ちたり春眠し  
花冷すこんなところに自刃の碑  
火床まで来て振り向けば古都霞む  
二〇三三年四月三日  
蛇行して川に沿ひゆく花の雲  
み吉野は山もポストもさくら色  
杉美林縫ふがごとくに落花舞ふ

豊実  
たか子  
せいじ  
あひる  
もとこ  
明日香

二〇三三年四月二日

花吹雪両手つき上げ滑り台  
湯上りのうなじを撫づる落花かな  
鶯の矢継ぎ早なる石舞台  
湧き出づるごとくに盛る雪柳  
春陰に耐機中なるトラクター

なつき  
むべ  
明日香  
隆松  
かえる

二〇三三年四月一日

足裏で根の機嫌聞く桜守  
悪しきことみな嘘であれ万愚節  
四月馬鹿買物メモを家に忘れ  
蝦夷の旅もてなしならめ馬糞風  
掘返す工事の穴へ桜散る  
春空に大十字切る飛行雲

みきお  
たか子  
満天  
むべ  
あひる  
みきえ

毎日句会みのる選・二〇三三年四月九日